

民俗資料館だより

第5号 1998. 3. 20

発行 加茂市民俗資料館

住所 加茂市大字加茂229-1

電話 0256-52-0089

より身近な民俗資料館として

加茂市民俗資料館長 田澤 弘 一

民俗資料館が、下条地区から現在の加茂山公園内に移転開館して、早くも3年4カ月が経過いたしました。この間、市内、市外から延べ1万人近くの皆様から入館を頂いております。

展示をご覧になった方からは、様々な感想が寄せられ「加茂の昔の姿がよくわかり参考になった。」「加茂を出て何十年ぶりで里帰りしたが、資料館に来て懐かしさで一杯になった。」「縄文時代の土器が加茂から発見されていたことを知り、とても興味深かった。」など温かい感想や率直なご意見も頂いており、今後もより身近な資料館でなければと思った次第です。

現在、資料館においては約1,200点を常時展示しており、1階には加茂の祭り、歴史、古文書、そして土器などの考古資料を展示しております。さらに2階においては、加茂の産業の歴史に関連した建具の製造工程や木工の特産品、あるいは漢方薬の製造器具、機織り機、陣ヶ峰瓦、紙漉き用具などの展示をしております。また2階では、復元した昔の農家の居間、商家の帳場もあり、まるで映画の場面に出てくるような造りとなっております。

どうか、お気軽にお立ち寄りくださるようお願いいたします。

最後に、加茂市の埋蔵文化財調査等で大きな足跡を残されました八百枝茂先生が昨年12月25日に89歳で永眠されました。資料館だよりの中に、文化財調査審議会委員長の古川信三先生から八百枝先生への追悼の玉稿を掲載させて頂きましたが、謹んで八百枝先生のご冥福をお祈り申し上げます。

入館者の声（アンケートの要約）

当資料館が平成6年11月現地に移転し、平成7年には多くの来場者があった。そこで資料館の展示の内容や方法、資料館について来館者はどのような考えを持っているのか、その考えを今後の運営に生かすことが出来ないかということで平成8年度からアンケートをとった。展示の内容や方法については概ね良好であったが、資料館の展示スペースの拡張、映像や音声を駆使してのバラエティーに富んだ内容紹介、特別展・企画展の計画実施についての提案があった。更に、より豊富な資料の展示、体験コーナーの設置、消えてゆく現景（街並み）の写真保存等の意見もあった。直ちに取り組める提案には十分応えたいと思うが、ただ施設と関わってくる提案については将来の課題とさせて頂きたい。

I 八百枝先生追悼の記



加茂市文化財調査審議会委員長 古川 信三

前の加茂市文化財調査審議会委員長八百枝茂先生。平成9年10月20日発病以来、燕労災病院に於いて療養中のところ、近代医学の粋を集めた集中治療のかいなく、御家族御親戚の必死の祈りも空しく12月25日午後0時45分腎不全の為、溘焉として90年の御生涯を終えられ、幽冥境を異にされました。誠に哀惜の情にたえません。謹んで御冥福をお祈りします。

先生は明治41年10月20日三条の名門八百枝家に生を享けられ、昭和2年旧制三条中学校、昭和6年東京歯科専門学校を卒業、昭和10年26歳にして加茂仲町に歯科医院を新築開業、昭和55年現在地に近代様式三階建の医院を新設移転し、御子息と共に医療を続けておられました。創業このかた近年老境に達し悠々自適の境地に至るまで60年間、地域医療に貢献されると共に、南蒲原郡医師会長や各学校歯科医など多くの要職につかれておられます。

斯の如く極めてご多忙な本業にも拘らず、昭和24年加茂市公民館運営審議委員に就任し12年間続け内会長5年、図書館協議会委員30年間内会長5年、文化財調査審議委員22年間、内会長7年、加茂市史編纂委員など社会教育に尽粹せられました。これらの御功勞に対し加茂市長表彰の他、昭和63年に文部大臣表彰を受けておられます。賞詞は「考古学と郷土史の研究に取り組むなど社会教育の振興に寄与」と謳われております。大臣表彰の冒頭に挙げられたように加茂の考古学は先生によって創始され、先生によって展開されたと申しても決して過言でないと信じます。昭和50年に成った『加茂市史』の「考古編」70頁に及ぶ執筆こそ、前人未到の先生の世界であり、研鑽と汗の結晶であるといわれましょう。

先生が携われた遺跡は加茂では市役所遺跡ほか14ヶ所、田上では川船河遺跡ほか8ヶ所に及んでおります。就中、最も苦心をされ、最も成果をみたのは水源池遺跡と千刈遺跡と思われます。加茂市民俗資料館を訪れ夥しい土器類に接すると、発掘から復元までの長年に渉る先生の御辛苦が胸に迫って来ます。殊に圧巻は、水源池遺跡の代表的出土品の深鉢で火焰型土器を思わせ、これ等に對峙すると彷彿として先生の面影が偲ばれます。

先生は土器採取や出土情報に接するや、何をおいても直ちにタクシーで現場へ駆けつけるのを常としておられました。「治療中の患者は口をあけたまま、先生の帰りを待っている」などの伝説も生まれました。純真無垢、一筋に貫かれた先生の一生を語る逸話といわれましょう。

先生の炯眼は昨年発掘を終えた鬼倉遺跡が如実に物語っています。20余年前、既に『加茂市史』に「弥生、古墳時代の遺跡は水田の下、1～2米も深く埋まっている」と断言しておられます。果たして鬼倉遺跡は水田の下、1米に埋没していたのです。

先生は人となり温厚にして寛容、長者の風格をそなえておられ、衆望の集まるところ推されて要職の会長を歴任されています。茲に先生の偉大な御功績を贅えると共に、50年に及ぶ御薫陶に感謝を申し上げます。故八百枝茂・法名浄国院釈修徳先生の春風颯蕩とした在りし日の温容を想い、慈父の如き温顔を偲び追悼の記と致します。

II 加茂の生んだ蘭法医、森田千庵について

加茂市文化財調査審議会委員 佐藤 賢 次

蘭学とは江戸時代において西洋諸科学の研究を指しているが、越後では文政年間（1818-29）に町医者の中から京・江戸に遊学して蘭学を学ぶ者がはじめ、彼らの間で始まったといわれています。加茂の耕泰寺大門前で町医者を営んでいた森田千庵はそうした先駆的人物の一人で、越後蘭方医の第一人者として有名であったので、その足跡を追ってみましょう。

森田家はその「系図」（和田芳夫氏蔵）によると、先祖は上杉家臣の山吉氏から出たとしています。山吉景長の3男景広が上杉氏の会津移封時に越後に残り、その子景明の時に羽生田村（田上町）に住し、母方の森田姓を名乗ったと伝えています。加茂森田家は景明の孫にあたる栄盛が医師となって加茂で開業したことに始まり、以後代々漢方医を家業としてきました。

千庵はそれより4代目にあたり、寛政10年（1798）に父甫三の2男として生まれました。父の甫三は若い頃江戸に登って幕府医官岡甫庵について漢方医学を学び、病理や薬剤の研鑽にも努めた人で、難病については師の甫庵の意見をはじめ、広い学問的交友関係をもっており、学究的・合理的な治療態度は近在の患者たちの評判になったほどの人だったようです。特に晩年には蘭方医学にも興味をもち、文通をしていた京都の蘭学者藤林普山が来越し、森田宅にも寄ってからは、学んだ蘭方医学の成果を治療に取り入れ、そのことは有名になっていたようです。こうした雰囲気の中で、千庵は育ちます。14歳で江戸に出て、古医学を学びます。しかし次第に父の影響で蘭学に傾斜していき、文政3年（1820）に藤林普山が来越した時の誘いを受けたことで、翌4年上洛し、普山の藤林塾に入門します。時に23歳。在京中は普山の門弟中でも一頭群を抜き、蘭方医小森玄良が西刑場でおこなった解剖に参観を許され、また「クルムスの解体図表」や薬の品質・強度の基準を定めた「バタビア局方」の翻訳、さらに蘭日辞書「西語名寄」をまとめています。短期間でこうした力を発揮しえたことに驚くばかりです。文政6年からは江戸に登り、宇田川玄真・榕庵の宇田川塾に入門、一層の蘭語と蘭方医学の研鑽に努めます。また同9年から翌10年にかけては長崎にも遊学し、有名なシーボルトにも師事しました。しかし同11年に父が没したため加茂に帰り、以後は家業を継いで地域医療に専念していきます。

千庵の名を高めたのは、天然痘（痘瘡）の種痘を越後で最初に取りくんだことと、家伝薬の一粒丸を改良し、広範囲に販売したことであろう。一粒丸はアヘンを基にした腹痛・下痢止め妙薬として売り出され、特に嘉永5年（1852）からは江戸本町2丁目の大黒屋儀助を通じて江戸でも販売したことである。小林長栄氏所蔵の嘉永6年「為取替一札之事」という証文によれば、開店にあたって大看板をはじめとする諸費用に265両にもなる借金を大黒屋にしている。看板は加茂の森田家のもの（青山学院大学図書館所蔵）と同じく「Hollandsch Remedie 一粒丸」と記されていたと推測されるが、こうした大金を借りても売れゆきに千庵が自信を持っていたことが推測されます。

千庵の研究は長谷川一夫氏（上越市立和田小学校長）によって進められていますが、氏は『洋学史研究』12号に散逸した千庵関係資料の所在についてその全容をまとめています。

III 平成9年度の歩み

1、入館者数

平成9年4月～平成10年2月

	市 内	市 外	計
大 人	497	945	1,442
小中学生	435	272	707

2、資料収集の状況(2月末現在)

本年度は8名の方から128件383点のご寄贈を賜りました。お礼を申し上げ紹介させていただきます。

〈寄贈品名〉

- ・大八車 1点
- ・レコード収納箱他 34点
- ・わりご 1点
- ・天秤棒他 10点
- ・弓張提灯他 261点
- ・相撲番付表他 86点
- ・台秤他 9点
- ・せんばのみ他 25点

〈寄贈者ご芳名(五十音順 敬称略)〉

浅野 潔 有本 富一 小島 司郎 近藤 テイ 斎藤 久也 真保寅次商店
瀬高 ハル 吉田 久夫

3、レファレンス・サービス及びアンケート・調査(民俗資料館への問い合わせ)(2月末現在)

平成9年度(4月～2月)はレファレンスが16件、アンケート・調査が21件あった。レファレンスの内容は例年の通りであるが、中には卒業論文の資料にというものもあった。

また、アンケート・調査では資料館の職員・展示・所蔵品に関すること、近代遺跡に関すること、文化財行政に関すること等々であった。

その主なるものを3・4件づつ挙げてみる。

A レファレンス

- ・雪室(雪にお)の所在と利用法について
- ・ジャンケン以外の野球拳のような拳の所在について
- ・加茂市の町屋、間取りの変遷について
- ・秋葉信仰について

B アンケート・調査

- ・近代遺跡(幕末から大戦終結頃まで)の所在に関する調査
- ・「戦争体験に関する資料」の収蔵状況等の調査
- ・学校、小中高生の博物館利用に関する調査

C テレビの取材

- ・民俗・歴史番付手拭いのマカロニーについて(編集の都合上放映せず)

4、館外活動

① 古文書講座

資料館の記録を調べると古文書講座は昭和56年に始まり、正式には59年より関正平氏を講師として開催された。受講生は年々増加してきたが近年は横ばい状態である。

・開催日 7月5日 7月26日 8月9日 8月30日 9月20日

・会場 加茂市公民館 第一研修室
(時間 午後7時～午後9時)

・講師 加茂市文化財調査審議会

委員 関 正平氏

同 長谷川昭一氏

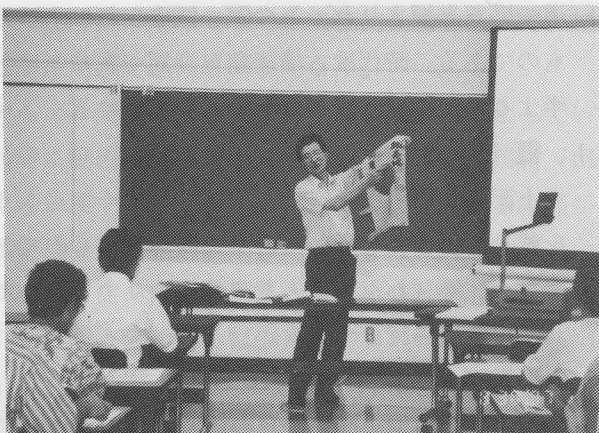
・受講者 延べ109名

・内容「加茂町明細帳と廻米関係文書を読む」

(イ)関氏は文政4年、加茂町より出雲崎御役所に差し出された文書

をもとに、当時の田畑の面積、年貢、租税、高札場の位置、その他について解説された。当時の町や町民の生活の様子がありありとかがわれた。

(イ)長谷川氏は蝦夷地御用米積立帳をもとに、当時加茂より松前、江差へ送られた米の石高や運送料等について解説された。加茂市川家の羽振りや庄屋としての規模がうかがわれ興味深いものであった。



② 歴史講演会

近世藩政史を研究課題にされておられる講師が、今回の演題に取り組まれるについては大変ご苦勞されたのではないかと推察される。なお、講師は多くの市町村史編纂に携わっておられる。

・開催日 11月15日

・会場 加茂市公民館 第一研修室

・演題「鎌倉時代の青海荘について考える」

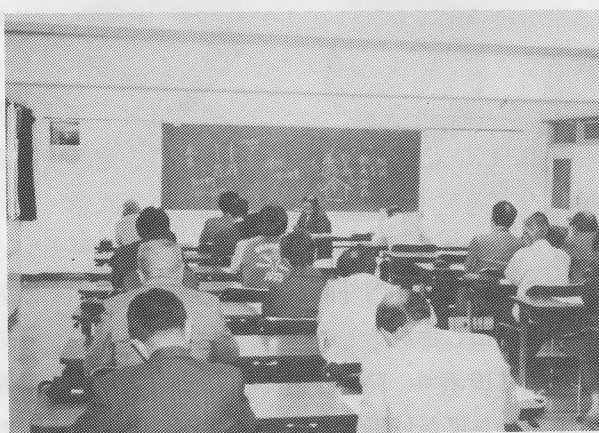
・講師 加茂市文化財調査審議会

委員 佐藤 賢次氏

・参加者 24名

・内容 近年発見された伊達氏に関する石田文書中に、越後国青海荘垣(埴)生田と記されていたことを追

求するため、当時の戦乱の状況や青海荘の地頭職の変遷などについて、中世文書や系図を駆使して解説をされた。

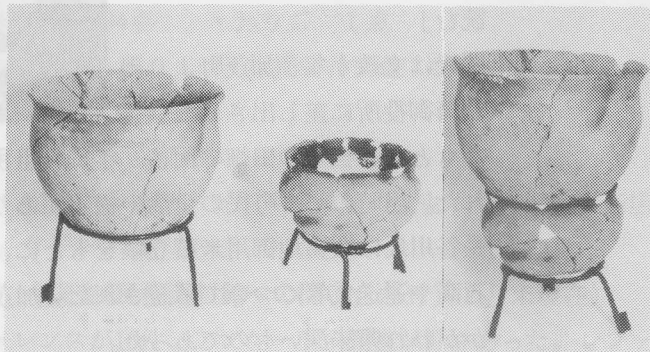


Ⅳ 展示資料紹介コーナー

シリーズで紹介している市指定文化財。今回は昨年に引き続いて第2展示室の「千刈遺跡出土土師器」14点のうち数点を紹介する。昭和48年、大皆川改修工事中「伊藤景昭氏」によって発見された遺跡を、加茂市教育委員会の主催で「中島栄一」「駒形敏朗」「八百枝茂」三氏の指導で緊急発掘された。その際、採取された土器片を三氏並びに三条商高考古班員で復元されたものである。時代は古墳後期鬼高期で本県では数少ない時期の遺物である。実年代は五世紀後半より六世紀前半までのものと考えられる。

1、甑（こしき）・椀（わん）

上記は2個体でワンセットになり同一地点より発掘された。椀（わん）の上に甑（こしき）を載せて組合わせ蒸し器として使用したものであろう。しかし、甑（こしき）の方は煤の付着もなく、椀（わん）の方も容量が少なすぎるので祭祀用に用いられたものと思われる。甑（こしき）は高さ12.7cm、口径19.6cm、底に単孔があり孔の径は4.7cmである。色調は灰褐色で全面に櫛目の模様が付けられている。椀（わん）は高さ9cm、口径12.7cm、胴部最長径13.7cm、口縁立ち上がりは1.5cmで僅かに外反し口縁内面は全周にわたり磨耗している。色調外面は淡褐色、内面は黒色でいわゆる「内黒土器」である。



（甑）

（椀）

（組合せ）

2、台付椀（だいつきわん）・壺（つぼ）



（壺）

（台付椀）

この2個体は同一地点から発掘された。台付椀（だいつきわん）は高さ8.5cm、口径10.3cm、底径7.9cm、内外面ともへら磨きしたもののようで滑沢がある。壺（つぼ）は高さ9.5cm、胴部最大径10.2cm、口縁部に対称的に2個の小孔がある（1孔は1部が欠損）。なお、口縁は約20度外反している。底は丸底で煤跡

がある。両個体内外面ともに茶褐色で模様はない。

3、甑（こしき）？

高さ19.6cm、口径、胴部最大径16.5cm。模様がなく茶褐色でかなり煤が付着している。底の部分が破損しているので甑（こしき）とは断定できないが、底の部分に近い所に、周囲全体にすり減った跡があるので甑（こしき）としての可能性が大である。



（甑）

（昭和55年発行「加茂市の文化財」加茂市教育委員会編より）

V 平成9年遺跡発掘調査と出土遺物について

加茂市教育委員会社会教育課主事 伊藤 秀和

本年も様々な開発による本発掘調査・確認調査が行われ、たくさんの考古資料が得られた。特に鬼倉遺跡は新聞などに大きく取り上げられ、それに関連した特別歴史講演会も開催され、盛況であった。ここでは、その調査結果の一部を紹介する。

① 馬寄遺跡—古墳・古代—

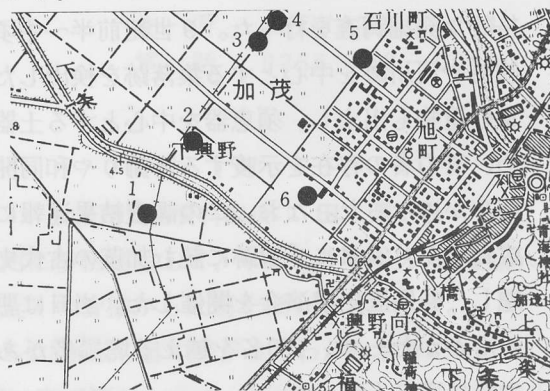
所在地 加茂市大字加茂字馬寄地内

調査面積 約120m² (確認調査)

調査期間 平成9年3月5日～3月10日

調査原因 民間開発

調査の概要 僅かな調査面積だったが、多くの遺物が出土した。遺物のほとんどは、地表下約1mのところから出土した古墳時代前期(約1,700年前)の土師器が主体であるが、時期不明ながら木簡も1点出土した。



1. 馬越遺跡 2. 鬼倉遺跡 3. 新道遺跡
4. 丸瀉遺跡 5. 馬寄遺跡 6. 中沢遺跡

遺跡位置図 S=1/50,000

② 馬越遺跡・丸瀉遺跡・新道遺跡—古墳・古代—

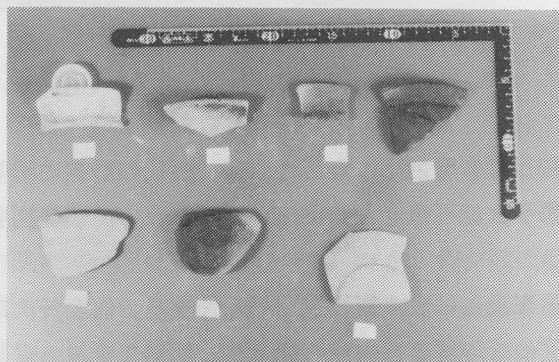
所在地 加茂市大字下条字中谷地・大字加茂字丸瀉地内・大字加茂字新道地内

調査面積 約210m² (馬越遺跡)、240m² (丸瀉・新道遺跡) (確認調査)

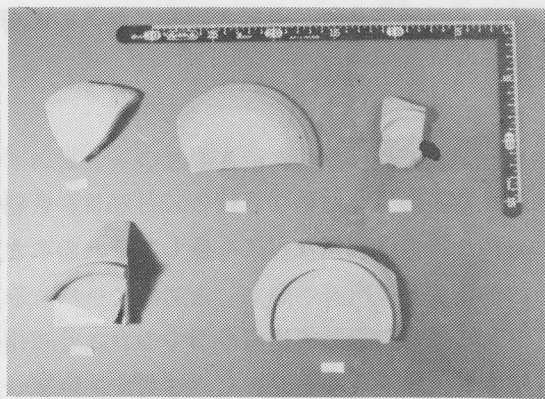
調査期間 平成9年4月14日～4月25日

調査原因 国道403号線道路改良工事

調査の概要 今回の調査は昨年に引き続いて行われた第2次確認調査で、馬越遺跡では昨年同様、平安時代の遺物が多量に出土した。遺構も見られ、集落跡と推測される。丸瀉遺跡の調査ではやや離れた地点でやはり古墳時代前期の土師器が出土し、新たに新道遺跡の存在が明らかとなった。丸瀉遺跡、新道遺跡ともに平野部における遺跡形成が古墳時代前期まで遡ることを証明する貴重な遺跡である。



新道遺跡出土遺物



馬越遺跡出土遺物

③ 鬼倉遺跡—古代の集落跡—

所在地 加茂市大字下条字中谷地・字鬼倉

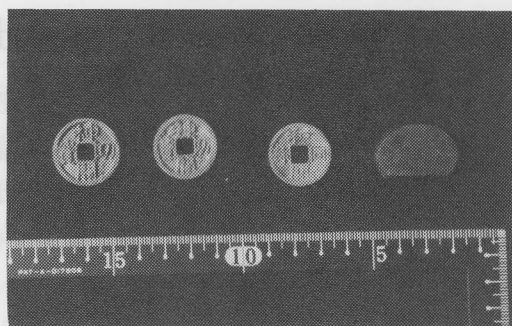
調査面積 約1,900m² (本調査)

調査期間 平成9年7月28日～12月24日

調査原因 国道403号線道路改良工事

調査の概要 昨年の確認調査の結果に基づき、本格的な発掘調査を行った。9世紀前半～中頃の建物跡や河川跡を中心とする集落跡を検出した。多量の遺物も出土し、須恵器を中心とする土器を初

め、有力者の存在を示唆する帯飾りや和同開珎なども出土し、非常に重要な遺跡であることが明らかになった。なお、この調査結果速報にあわせ、文化庁記念物課の坂井秀弥氏を講師に平成10年1月24日に「遺跡に読む加茂の古代史」と題し、特別歴史講演会を開催した。当日は悪天候にもかかわらず、100名を越える聴講者があり、大変に盛り上がった。



鬼倉遺跡出土遺物

④ 中沢遺跡—弥生・古代・中世—

所在地 加茂市大字下条字中沢地内

調査面積 約340m² (確認調査)

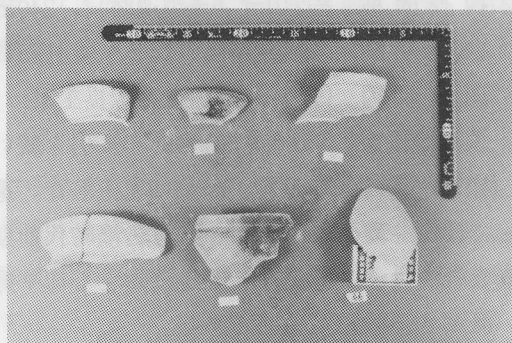
調査期間 平成9年12月17日～12月25日

調査原因 工場建設 (民間開発)

調査の概要 本遺跡からは、地表下50cm前後から平安時代を主体に近世までの遺物が、地表下約150cm前後から加茂市内初の出土となる弥生時代後期 (約2,500年前) の土器が出土した。2m近い深さから弥生期の遺物が出土したことは大変な驚きであり、古墳時代より遡る遺跡が平野部にあることが示唆され、今後の調査に与える影響は大きい。



特別歴史講演会風景



中沢遺跡出土遺物

編集後記

第5号の編集を始めた直後の12月26日、資料館が大変お世話になった八百枝茂氏の訃報に接した。10月頃には元気なお姿に接していたのと思うと誠に残念としか言いようがない。ご冥福をお祈りいたします。

第5号発刊に際してはご多用中のところ古川信三氏には故八百枝茂氏の追悼文を、佐藤賢次氏には玉稿を賜り厚くお礼申し上げます。今後一層のご理解ご協力をお願いする次第です。